

滋賀短期大学附属すみれ保育園の開園に寄せて — “ノンコンタクトタイム” の導入によるこれからの保育—

松村都子*

地域連携教育研究センター，滋賀短期大学附属すみれ保育園

For the Opening of the Sumire Nursery School Attached to the Shiga Junior College
- by the Introduction of "the Non-contact Time"-

Miyako MATSUMURA*

Regional Collaboration Education and Research Center
Sumire Nursery School Attached to the Shiga Junior College

1 はじめに

昨年4月から今春の「滋賀短期大学附属すみれ保育園（以下，附属すみれ保育園）」開園までの1年間の日々は，改めて，社会情勢の変化を踏まえた3法令（保育所指針・幼稚園教育要領・幼保連携型認定こども園教育保育要領）の変遷と改定（改訂）の示すところや保育現場に求められていることが何なのかを考える機会となり，同時に「附属すみれ保育園」の“開園”が保育現場の夢や理想，期待をどう実現できるかを担っていると感じる日々でもあった。



近年，全国の保育現場は，常態的な保育士不足問題と保育の量の拡大と無償化により，保育をサービスとするニーズの高まりの中で，疲弊し混んとしている。一方，保育所保育指針では，改定の趣旨理解と保育者の意識変革，保育の「質」の向上への取り組み，地域や保護者への子育ての支援のセンター的役割に力を入れていくこと，健康及び安全への備え等が示され，求められていることはとても多い。こうした保育現場の現状を踏まえながら，子どもを権利の主体として位置づける児童福祉の理念“子どもの最善の利益”を改めて問い直し“今，求められている保育園”について，考え，実現し，発信できる保育園を本園職員が自ら意識し，実践しようとする園づくりを目指したいと考えた。

そこで，全職員が保育について，ゆっくりじっくり考える時間を確保し，開園への思いやこれからの保育の方向性を共有する必要があると考えた。そのために，新設園だからこそ可能にできる大胆な

* E-mail: m-matsumura@sumire.ac.jp

“ノンコンタクトタイム（保育から離れる時間）”の導入に着手し、滋賀の幼児教育の牽引をしてきた滋賀短期大学の知見と支えをいただきながら、子どもと保護者、そして保育者の「今と未来につながる幸せ」のための保育所にあり方を求め続けたいという強い思いをもって開園を迎えた。

2 新園舎の環境について

「附属すみれ保育園」は、守山市の駅周辺の中心市街地から少し離れた文化ゾーンに位置し、自然環境に恵まれたところにある。園の周辺には豊かな田園が広がり、毎日の散歩には事欠くことなく安心して出かけることができ、四季折々の楽しみを味わえる市民運動公園やホテルの生息するうつくしい川もある。立命館守山中学校・高等学校のグラウンドに隣接していることで、生徒とあいさつを交わす環境に子どものほほえましい姿が見られたり、学区内の公民館、小学校やこども園との交流があったりと、地域環境を活かし地域に根付いた保育園づくりを目指していけると考える。

また、本園は“園舎全体が子どもが育つ環境”と捉えている。明るさや開放感、人とともにいる空気が感じられ、自ら道具を使い生活する空間として工夫のある園舎、安心・安全な設備環境を、建設にかかわるすべての方々が、一緒に考え工夫していただくことができ、本当に感謝している。

園庭を取り囲むように設けられた保育室は、園庭で遊ぶ子どもの様子が一望できることで室内と室外の一体感が感じられ、芝生の乳児園庭や築山・広い砂場のある大園庭等は、子どもの発達を考慮し全身で伸び伸びと遊べる環境となっている。園舎を囲んで四季折々の花や実を楽しむことができる植栽や0～2歳児の保育室から直接出ることができるお散歩小道等、日常的に園に居ながらにして自然の移り変わりを味わえるものとなっている。

また、木の建具やクラス表示の織布、戸外の手洗い場のタイル張り、保育室からテラスへの開放感は、くつろぎやあたたかさ、居心地よさを感じられるものである。

さらに、それぞれの年齢に合わせた手洗い場の高さや奥行き、照明スイッチの場所等を細かく調整していただいたことで「自分でできる環境」を、また、水道の蛇口やトイレの水洗、照明を自動にしないことで「自分の必要感と責任をもって行う環境」を整えていただけた。多目的室（にこにこルーム）に設けられたキッズキッチンには、火を使った調理体験がしたいとガス調理器具を置き、給



園庭を一望できる園舎



乳児園庭につながるお散歩小道

食室とやり取りができるようになっている。

あえて最新技術の便利さを求めず、子どもにとって必要な経験としての不便さや“ちょうどいい”を取り入れることで、自分で行うことや協力、気遣い、行為の始まりから終わりへの責任、意識や思考の広がりへとつながる豊かな保育環境を整えていただけたと思う。

こうした恵まれた環境を十分に活かすことで、「附属すみれ保育園」の特色ある保育活動の工夫と展開につながれると考える。



にこにこルームのキッズキッチン

3 本園の保育理念について

保育や教育の場では「不易と流行」が実践の指標になり、変遷を支えていると言われる。

裁縫女学校から始まる滋賀短期大学は、生活する力を学問として探求し、時代の変化に対応しながら、正しく不易と流行を問いつけてこられたと思う。特に、本学の教育理念「心技一如」(心の育ちと実学(体験)の豊かさ)の精神は、生活を学びへ、学びを生活につなげていく実学の豊かさを心の育ちとする知・徳・態を網羅したものであり、時代を越えた昔も今も変わらない育ての心、保育や子育てに大切な真髄であると感じた。

子どもは5感を通して育つといわれ、特に、子どもが、いかに「手」を使って育つかということを乳幼児期には大事にしたいと考えている。手から情報を集め、手で味わい、手で操作し、手を通して思考し、手をつないで仲間を求め、手を重ねて協同し、手を使って実現に近づく。そういった自分の人生を主体的に、創造的に、自分らしく生きていく子どもの育ちに、「手」を使うこと(体験)を大事にしたいという保育への思いは本学の教育理念と重なるものである。

こうしたことから、保育所保育指針の改定を踏まえた「附属すみれ保育園」の保育理念・目標を次の通りとした。

《保育理念》「心技一如」

心の育ちと実学(体験)の豊かさを保育・教育の神髄とする「心技一如」(学園理念)を保育理念とし、「生活(遊び)から学びへ、学びを生活へ」循環・発展する保育の中で、夢や希望をもち自分の生活を創り出す“子どもの主体性”を育てる。

《保育目標》「夢や希望をもち自分の生活を創り出す子どもの育成」

- (健康) 明るく元気、体を動かす楽しさを育てる。
- (自立) 自分のことは自分で、やり遂げる粘り強さを育てる。

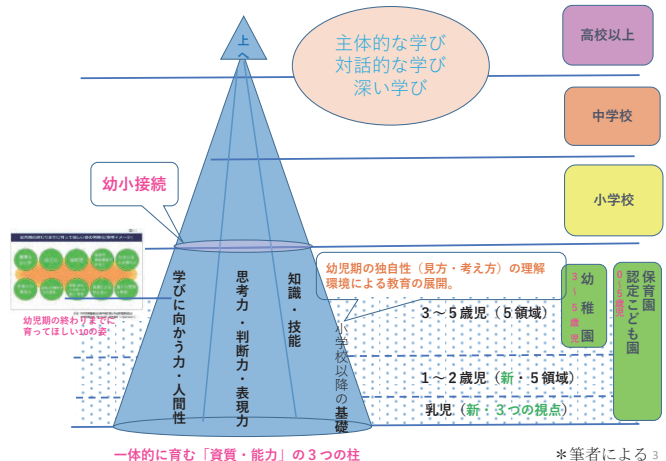
- （共生・共存）みんなで一緒に暮らすことを喜ぶ気持ちを育てる。
- （学び）「見て、聞いて、考えて、試して、伝えて」繰り返すことから学ぶ子どもの発達に応じた保育を展開する。
- （養護）家庭生活を含めた一日の生活に配慮し、健やかな育ちを支える。

今回初めて同時告示となった3法令では、右図のように、3歳児以上児の保育所保育を幼稚園や幼保連携型認定こども園と同じ幼児教育を行う施設として内容が共通化された。また、乳児期から高等教育まで“一体的に育む「資質・能力」の3つの柱（知識・技能②思考力・判断力・表現力③学びに向かう力・人間性）が一貫化され、“幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿”により、保幼小の接続・連携等も具体化された。また、これまで幼稚園教育に準じるとしてきた保育所保育のあいまいであった3歳児未満児の保育についても、0歳児、1～2歳児が区別され“ねらいと内容”が明確化され、3歳児以上の5領域との整合性が図られたことの意味は大きい。

こうした改定は、表①の通り、平成6年12月策定のエンゼルプランにより「仕事と子育ての両立支援等の環境づくり」「少子化」対策として、低年齢（0～2歳児）保育、延長保育等の長時間にわたる保育、認定こども園の開始等、多様で弾力的な保育サービスによる保育の量的拡大が進められた

ことで、保育サービスへの需要が高まったことに始まると考えられる。長年、幼稚園教育に準じるとされていた保育所保育指針を平成20年に法令化し、今回の改定での積極的な幼児教育の位置づけや

幼児教育に関する指針・要領の改訂のポイント



*筆者による3

表① 保育園保育所指針・幼稚園教育要領の変遷

*筆者による

	幼稚園	保育園	備考
昭和31年	幼稚園教育課程の基準(編集)		
昭和39年3月	教育要領(6領域)の法令化(研修の義務付け)	要40年:保育所指針編集(幼稚園に準じる)	
平成元年3月	5領域に再編成 ねらいと内容 幼稚園教育の基本	要2年:5領域再編成(養護的機能の明確化)	H2:「1.57ショック」少子化問題 H6:エンゼルプラン 保育所の長時間化 低年齢保育の拡大
平成10年12月	保育者の役割 計画的環境構成 幼小連携 子育て支援 預かり保育	H10:乳児の一般化 要11年:地域子育て支援の役割 職員研修への取組	H12:家庭的保育創設 H18:こども園の開始
平成20年3月	一部改訂	保育所保育指針の法令化 保育所の役割、社会的責任	要領、指針同日告示 H22:家庭的保育を国の事業 H26:認定こども園法令化 H27:子ども・子育て支援新制度施行(給付)
平成29年3月	3法令の改訂・改定(共通化)		
平成31年	幼児教育の国策化		

保育内容の共通化は、子ども・子育て支援新制度施行によるものであり、さらに、幼児教育の無償化は、まさに「共通化」を必要不可欠なものとした。

こうしたことを踏まえ、保育所は、幼児教育の「共通化（横軸）」と区部分けされた0歳児の“3つの視点”，1～2歳児の“5領域”，3歳児以上の“5領域”からつながる「一体的に育む“資質・能力”の3つの柱（縦軸）」について、改めて3法令の改定の趣旨理解や幼児教育・乳幼児保育について再考し、新しい保育所保育のあり方を探求していく必要がある。

保育所で長時間過ごす子ども達のための「附属すみれ保育園」は、保育所保育指針を十分に理解し、「子どもの暮らし」に着眼しながら、生活者として自立に向けた保育を展開したいと考える。当たり前の「暮らし」の中には、多様な彩りのある豊かな教材がふんだんにあることを認識し、“暮らしから始まり、暮らしに返していく”という人間の学びの営みがある保育園でありたいと思う。日々の暮らしの中で、様々な人の役割、知恵や工夫、多様な得意技を発揮しながら共に生きる大人の姿を通して、調理や洗濯をする様子、掃除をしたり、ものを修理したりする暮らしを見、経験しながら、時代送りができる保育園でありたい、多様な人たちと共に生きる喜びを味わえる保育園でありたいと願っている。時代を越えてきた「心技一如」の学園理念は、本園の新しい保育への探求や方向性を、不易と流行をもって導いてくれるものと思う。

4 保育の「質」を支えるノンコンタクトタイム（保育から離れる時間）の導入

「附属すみれ保育園」の目指す保育について考えるとき、保育所の現状にも目を向ける必要がある。保育所の抱える課題は、①量の拡大による園児数の増加②多様な保育事業の拡充（乳児保育、一時預かり保育、休日保育、延長保育、障害児保育、等々）③職員体制（短時間保育士の導入による非正規職員の割合増加、職員配置基準）④保育士不足の常態化⑤保育士の資質、育成⑥職員連携と分担⑦研修や書類等の減少と増加の矛盾⑧保護者との連携・協力⑨保育所の設備・環境が挙げられている（保育の「質」向上調査より）。法令化や多様な保育事業により保育所保育が充実する一方、保育士不足の常態化を起因とした複雑で不規則なシフト勤務体制が生まれ、勤務の終日を保育に当り、事務時間もなく、有給も未消化、職員のコミュニケーションも図れず、保育者の働き方への不満から生じる疲弊感が保育現場にはある。また、必要な研修も受けられない現状や保育の創造が保育者の個々の努力に任されていること等、保育の「質」への課題も山積している。

こうした現状を本園では、新設園ならではの大胆な発想をもってノンコンタクトタイム（保育から離れる時間）を導入し、保育者が生き生きとやりがいと誇りをもって働く園づくりに取り組むことにした。

保育所では年齢ごとの職員配置基準で、開所時間を30分単位の利用者数による職員配置を行うが、殆どの保育所は短時間保育者の雇用が増える中、複雑で不規則なシフト体制が組まれている。この現状のままでは働き方改革にもなかなか着手できず、ノンコンタクトタイムを導入したとしても、個人

単位の週に若干の取り組みに留まり根本的な改善にはつながっていかない。課題解決には、すべての職員のこれまでの雇用形態の見直しや職員の意識改革、保育の見直しを経営の視点から関連づけて行わなければならないので、簡単にできることではないと思われる。

本園では“新設園”の強みを活かして、下図のような職員体制によるノンコンタクトタイムを保障しており、保育者の重なる時間帯が保育者の協同的な保育への工夫や充実につながっていると感じている。

《「附属すみれ保育園」のノンコンタクトタイムを保障した職員体制》

* 午前保育担当者のノンコンタクトタイムは午後に、午後保育担当者は午前中に取り。

職員が重なる正午を挟む時間帯は、給食準備、配膳、片付け、午睡等、柔軟に保育サポートにあたり、教材研究や引継ぎカンファレンスを行う。

職員体制		7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
午前	正規・嘱託	早朝出勤							(サポート)	ノンコンタクトタイム				
午後					ノンコンタクトタイム	(サポート)								
午前	臨時職員								引継ぎ等カンファレンス					
午後		早朝出勤								ノンコンタクトタイム				
特別支援担当(7時間)										ノンコンタクトタイム				
土曜保育担当										ノンコンタクトタイム				
														ノンコンタクトタイム

12時間の保育時間を、午前と午後の6時間ずつ2名の固定勤務者で配置することで、重なる2時間を柔軟なノンコンタクトタイムとして活用でき、研修・研究の保障、職員間コミュニケーション（保育のPDCA・連携）や教材づくり、事務雑務時間の確保を可能としている。また、早朝保育や土曜保育の担当者を専任にしたことでシフト勤務の単純化・固定化が図れることになり、計画的な職務執行、また臨機応変な事態に柔軟に対応できるようにもなっている。

特に、0～2歳児における特定の保育者配置や3～5歳児の学級担任の変動がないことは、子どもの愛着、安心、信頼の気持ちを育む土壌となり、保護者にとっても、子育ての支援の観点からも安心できる園となってきている。また、職員にとっても有給取得や研修出張が可能になるだけでなく、互いの動静の把握が容易いことで、保育者間の互助的・協力的な体制への工夫ができ、同僚性を実感できる職場となってきている。

ノンコンタクトタイムの導入が、開園1年目の手探りの不安や新園の基礎づくりへの責務に翻弄されることなく、安定した保育経営を支えていると言える。



多くの保育者が参加できる園内研究会

月一回土曜日に開催する連携職員会議では、会議の前週には教材研究ウィークを設け、クラス担任全員で立案した保育計画を諮問していく工夫をしたことで、2時間で終える効率的な会議となり、勤務振替が実現でき、多くの職員参加型が定着できている。このことにより、それぞれの保育者が、保育の内容や思いを共有した保育展開にもつながってきていると思う。

また、クラスごとの保育研究や子どもの姿の記録からエピソード研究等園内研究も計画的に進められるようになってきた。さらに、就学までの6年間の生活自立を系統立てたものとして考えようと「排泄自立チーム」や「着脱自立チーム」が立ち上がり、話し合いを重ねているところである。ノンコンタクトタイムがあることで、保育の充実や安心安全な園づくりを保育者が主体的に考えようとする風土が育ち、「質」の高い保育が展開できる園として、これからも成長できるものと期待している。

ノンコンタクトタイムの保障は、有給取得の促進や時間外勤務の最小化にもつながっていることから、保育者にとって魅力ある理想的な園となるものと思う。こうした大胆なノンコンタクトタイムの導入は“新設園”だからこそ実現できるものであり、全国的にも先進的な取り組みとして、保育所のみならず幼保連携型認定こども園や預かり保育の開始によりシフト勤務が導入されつつある幼稚園の職員体制にも一石を投じられるものになると考えている。

5 特色ある「附属すみれ保育園」の取組みについて

本園では、園の強みを活かした特色ある保育の充実に取り組んでいる。「附属すみれ保育園」の強みは、なんといっても大学の知見と支えである。

本園には栄養教諭（大学講師と兼務）を配置していただいているので、毎月の未就園児事業「すみれが一でん」では、簡単に作れるおやつとレシピを提供している。「食」のもつ力は大きく、おやつを通して園が気さくで居心地よいところとなり、親子同士のコミュニケーションも図ることにつながっている。家庭でもレシピを見ておやつを作られたり、「すみれが一でん」の情報をママ友に話されたりと評判がよい。また、生活科の学生の調理提供も、子ども達にとって嬉しく憧れにもなったようだ。

地域の方の協力を得て作った畑では、旬の野菜が収穫できており、今年度はコロナ禍により実施できなかったが、栄養教諭と共に、園のキッズキッチンを多様に有効活用することで、栽培から調理まで「食」を通した豊かな保育活動や地域の子育て支援活動に広げていく工夫ができ、「食育」推進においても先進的な取り組みが可能であ



地域の方の協力を得て作ることができた畑



地域の方からホテルの住む川の話聞いて川遊び

と考えている。

さらには、本園には看護師の配置をさせていただいている。保育所には生後間もない乳児が在園することや長時間の保育提供の中、アレルギー疾患を有する子ども等の重大事故が発生しやすいことから、本園に乳幼児の保健や医療、健康管理に関する専門的な知識と意識があることは、保護者にとっても安心できる保育環境になっている。

もう一つの強みは、守山市の文化ゾーンに位置した自然環境に恵まれた環境にあることである。

園の周辺の豊かな田園、毎日の散歩で四季折々の楽しみを味わえる市民運動公園やホタルの生息するうつくしい川といった地域環境があり、七夕の笹竹を地域のお寺でいただき、子ども達と30分の道のりを笹竹を担いで持ち帰り飾ることができた。夏にはホタルの川で地域の方からホタルの話を聞き、川遊びに興じた。11月からは、田園の中のマラソンを楽しんでいる。こうした地域と共に展開する保育を感謝の気持ちで地域にも発信していき、地域に根付いた、地域と共に育つ保育園づくりにつなげていきたい。

また、守山市のホタルの保護や環境保全への活動が市民運動公園のホタルの森資料館を中心に行われており、残念ながら今年度はコロナ禍により開催されなかったが、初夏には盛大なイベント（ホタルパーク&ウォーク）が行われている。今後、こうした守山市のイベントにも地域の保育園として参加・貢献できる工夫をしていこうと考えている。親子や地域の方が園に参集し、ホタル観賞や夕暮れの集いのひと時を楽しむ場が、大学の学生の活躍や学びの披露の場となることを期待したいと思う。

6 「附属すみれ保育園」のこれからに向けて

今春4月に無事に開園を迎えたものの、新型コロナウイルスの猛威による想定していなかった事態に、さまざまな感染拡大予防対策が講じられ、「附属すみれ保育園」の船出は順風満帆とはいかない状況であったが、ノンコンタクトタイム導入により、開園1年目の基礎づくりに集まってくれた職員の尽力と団結力で、落ち着いた明るい保育展開ができていると感じる。

何しろ開園1年目は、すべてが初めてばかりの日々に追われ、明日の保育を職員で共通理解し展開するのに精いっぱい状態である。その中で本園のこれからを考えると、保育所保育指針改定の趣旨理解と保育者の意識変革、保育の「質」の向上への取り組み、今、求められている保育についての掘り下げは、まだまだ十分とは言えず、今後も一つひとつ丁寧に考え、学び、実践していかなければならないと感じている。と同時に、今までの保育所保育を問い直しながら、これからの新しい保育を創造していく必要もある。

また、乳幼児を抱えながら仕事に追われる保護者と長時間を保育園で過ごす子どもたちの生活の様子を見ると、地域の子育ての支援センター的役割の重要性も感じている。保護者や子育て世代の生活実態を受容し、悩みや課題を共にし支えながら、深い慈しみの感情、子育ての苦労の喜びや手間を次世代に確かにつなげていくことも、保育所に求められている時代の課題であると考えらる。

さらには、保育所の“養護”と“教育”を改めて問い直す中で、学校教育法（今回の幼稚園教育要領に中にも）記されている“幼児期の標準教育時間4時間”と「教育課程に係る教育時間終了後に行う教育活動（養護的配慮・預かり保育）」から、幼稚園と同等とされた保育所保育との整合性について考えを巡らしながら、時代を支える保育園として成長していきたいと願う。

加えて、守山市から保育者リカレント教育や現任保育者の資質向上に取り組む研修センター機能も期待されている。大学の協力を得ながら、自ら学び続けようとする保育者の育成に取り組み、滋賀の幼児教育は、やはり滋賀短期大学が牽引していると言ってもらえるよう魅力ある研修の充実に取り組んでいきたいと思う。

「附属すみれ保育園」の10年、20年後、今の保育者が世代交代した時にも、開園1年目の勢いを保ち、地域の中で、子育て世代の拠り所となる園でありたいと願っている。本園が、子どもと保護者、そして保育者の「今と未来につながる幸せ」のための保育園として発展していけるよう、全職員の知恵と工夫、夢をもって、ノンコンタクトタイムを最大に活かしながら、どっしりとした健やかな“いい園”づくりに日々励んでいこうと思う。